



明利5  
番 2777  
巻 2止

五

五

こく  
目  
兆



春

小  
狗  
集  
卷  
第  
七

春

春の風は下をまきおし  
 多し袖小一花ひらく  
 いろいこの内より  
 正月から春の  
 天多し枝より梅の香













とらりしつらき業わらふも  
約つあゝ花の本陰かゝるも草まね  
新ゆりよおのいそし手は  
寒き馬しりくくけきさりまを  
命んさうゆくりんやたるん  
あゝと花さだの庭のあつた  
日えんきにいん通をくれ  
流涕よむしとえにいん通をくれ  
ふ

目のいそしつらき業わらふも  
花のつらきそかりりや  
に手さういん通のあつた  
乃後せえ柳かゝるも草まね  
素直の却き目いん通  
わらしつらき業わらふも  
橋さうわらしつらき業わらふも  
遠くを濃らけいん通







角のなほ日記のとせり

毒茶とて二月の事とたつていふ 貞

高きくお法至理とていふ

将こころをいふ

打溜しとてお木のすれ枝

需るものとていふ

商人の心とていふ

いふとていふ事のとていふ

くらぶとていふ事のとていふ

くらぶとていふ事のとていふ

昔用にもいふ事のとていふ

くらぶとていふ事のとていふ

脊あつていふ事のとていふ

くらぶとていふ事のとていふ

くらぶとていふ事のとていふ

くらぶとていふ事のとていふ



け鶴く味高きこころのまめし  
き佛ふねのこころやうそ  
約たりりりり 毎りれうそ  
青目の星にゆりりりりり  
ぬすいまふんまうは素のまうり小神  
うまー人の口と国思らり  
わやつとこのあふたをひりけ日  
鬼かりくいつくら死れん

あめ地のわさささやじこわさ海ん  
君のちんか神安のちんか  
まらう天子まきまらやわえり次  
わんまじちんかまらんか  
ねーかまらりり 牲かくあり  
さばちまらまらりりりりり  
わいりりりりりりりりりり  
まらまらりりりりりりりり



中利と終ゆ分意んやう一

益軍今成盤とてん

睡りぬる山やうかろけ

あうりえきまらわん

伊くふこちひけの永日了

胡蝶のころこち

後くこ讀くこちわら源氏あ

七重八重龍とて

月とくくよま子よま九種

きくくくく

谷川へ伸きゆりかき

燈籠九火のけ

益の山月れ形数奇と

きんきん

お庄敷らうし月書と



杓櫛集卷第八

夏

三ヶ月くまがた切壺九つ集  
鳴る山り交衣九つ比九つ郭一と氣  
村南少きはわいたとやう  
子規鳴れ〜〜に暮るうらそ日

て〜〜此に共〜〜ふら氣  
一より小名宗五月のほ〜〜き次 貞徳  
蛙九つわは波あふらうり〜孝  
活ありい〜〜ありひ〜の集う〜  
檀九つ〜〜は〜〜乱と神  
い〜〜り小神あ聖九つおほ〜人  
あはああり九つ胸報と打〜  
〜〜れあふら〜〜味や〜〜人



あうらうらうら物おきふ  
其のけくきやあけのきうり  
飛のけくきやあけのきうり  
量火のけくきやあけのきうり  
えんとうのけくきやあけのきうり  
若くはのけくきやあけのきうり  
さし女よあうらうら物おきふ  
徳元

あうらうらうら物おきふ  
其のけくきやあけのきうり  
飛のけくきやあけのきうり  
量火のけくきやあけのきうり  
えんとうのけくきやあけのきうり  
若くはのけくきやあけのきうり  
さし女よあうらうら物おきふ  
徳元



おのろりいあし降あ

牡丹さ〜はら〜きこし方まひよは愛

えふあ〜く〜もろり病ふい

いよ〜くんのう〜の地ふよれま〜い  
正徳

お糸う〜の夢とんつら

夕歌や〜えにま〜く〜いぬん  
皇一

橋のトにま〜い〜く〜ちあ

葛蒲と〜え〜く〜く〜ま〜あの中

く〜い紫か〜ねや漆つん

く〜けが芥子か〜念花を咲かす  
貞徳

お糸あ〜りよ〜ま〜あ〜あ

夕歌の地さ〜い〜く〜く〜く〜

鬼と〜ありあ〜せ女本々り

ろ〜く〜や薊か〜中〜れ眉地り  
貞徳

瓦と〜塔か〜ま〜り〜い〜く〜

霞〜く〜げ〜も〜や鏡比と〜あ〜り



あつやとくちりあかたの  
清あつむいひく音柳うけ  
さとうさい物味もやうく  
笛古九やう靡よけん二三文  
晴人うくをさかへる群集  
九りんはとまじり笛古しあり  
物とて物りし中物多し  
汗とがさつこのゆりあつさう

あつやとくちりあかたの  
清あつむいひく音柳うけ  
さとうさい物味もやうく  
笛古九やう靡よけん二三文  
晴人うくをさかへる群集  
九りんはとまじり笛古しあり  
物とて物りし中物多し  
汗とがさつこのゆりあつさう



喝食たり目とくさるる  
炊心の一に足むり打移あり  
涼くくむみりや肩ぬき  
友の茶つくとえんよるる  
秋りりりりりりりりりり  
移りきとくくくくくくく

物櫛集巻之廿九

秋

目小見ぬまえわとく  
のやけくくく結の志るく  
大井の里に青匂にけ孝  
あつとくく極くさう  
画心花一肘九つさう  
朝靨の目けきくく



こゝや入目とまほく章此子  
西心の尾をうらまへし花の蝶  
よと見いさあり星の川あり  
藤籙と双六ららよ少りもひく  
未をにいとほし座の名も結鏡  
鹿と題あくよまう一奇一人  
是くきたりくある竹牛はき  
かゝるくうらや花と名の書

花のつとく帰さのそく  
書りよと鶴合やたてぬらんを  
枯らね板か実法このじん  
月ほとあうこのらんいんそく  
さかしく絶とくあるは川の書  
そくは板橋ありあは月ひけ  
月あふこの初あそこのらふ



まゝく見振く、君ゆらぬこと  
十七夜十八夜とて、月おそく  
侍禱まゝ、濱波とて、秋の夜  
著、磯急な、波の、月、のり、と、月  
夕、く、む、く、ひ、く、お、の、が  
ま、ふ、り、月、を、東、く、こ、あ、ま、し  
う、く、と、秋、な、ち、り、に、此、夜、の、夜、く、  
比、能、朝、か、り、夜、の、月、を、か、く、ひ、り

南く鹿かゝ敷とて、うら  
便あ、うら、うら、月、や、た、の、ま、く、く、  
つ、く、う、ら、人、の、神、の、紙、く、也  
月、く、い、れ、や、あ、ま、い、あ、う、ら、く、い、ち、  
朝、付、く、と、ん、か、り、た、く、く、ま、い、ひ、  
ま、く、く、お、れ、月、は、懐、く、と、こ、ん、ら、わ、く、  
な、ま、い、の、夜、ま、く、く、朝、く、く、  
日、く、た、ま、り、に、う、ら、や、り、の、く、ま、  
言、れ



目々々々目々々々目々々々目々々々  
葉のうひりやまきまふけきこも  
杖一棒とぞらうりゆり書  
月小くおと君を切やまへる讀  
霧少り霞へらうりふわめまう  
くほまばりよ物よまきく  
三味線と月にはいんりのりも  
紙とあつと島傳うつは海を  
新

けーくーるるれやいーくーらじ  
月の入意よ三味線とこけく日  
あーいとあーやあうん  
育物ちり月あそくそん  
かおれれ芋一れ粒まきとあれ日  
いーさきや霧ちりるはは日  
家とあくやあうん  
善しーらあまれれはあまれ



あやめかきしをわすれしるくく  
鳴ひしとあはれんねむの痛けく  
言てく火くくく言のふた  
輪はくく虫かひ前よおろり鏡  
登るくくくく枯風をかく  
痛れくくくくくくくくく  
大月あげく月とわいせき  
稼作や木の葉くくくくくく  
立れ

心あくくくく二千里の枯  
時くくく毛くくく尻くくくり  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
膝のくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく







おゆらうと丹波の粘ありし  
いにかりまきいこふ葉のちまき  
おらうししはむかひ  
神の美しきまきいこふ葉のちまき  
櫻と此種のはむかひ  
ゆりまきいこふ葉のちまき  
たふくまきいこふ葉のちまき  
いよまきいこふ葉のちまき

一わらうと丹波の粘ありし  
あふらの法をいこふ葉のちまき  
さうまきいこふ葉のちまき  
植へ早苗のちまきいこふ葉のちまき  
竹のちまきいこふ葉のちまき  
粘凡のちまきいこふ葉のちまき  
金はちまきいこふ葉のちまき  
かとうまきいこふ葉のちまき







や福のつ〜〜〜〜〜  
しら〜とあ〜してま〜おちう〜  
あ〜〜〜霜〜〜〜  
は〜〜は〜君〜海〜  
あ〜〜〜〜の〜  
あ〜の〜あ〜  
水〜の〜毛〜や〜月〜よ〜  
〜〜〜〜〜

あ〜あ〜射〜と〜  
さ〜〜ら〜  
あ〜鴨〜の〜  
あ〜〜や〜  
あ〜の〜の〜鴨〜  
あ〜小〜り〜  
あ〜を〜  
あ〜  
あ〜











言も六きゆりまげんやうらみの産  
筋のうらりまん  
言命とてはとの冠りさゆちや月  
神とやえんとうりともやえん  
辛酉十二月晦日にちかふん

杓櫛集卷才十一

憲

はむらうらうらんとくうらりかん  
白根のありうらうらり物あけき  
朝夕おきふ十八のこころ  
おれよまきとちかふはのありま  
果敢ありやや音子のこころ  
養女うらうらんのあまきとくえん



一万年と穿り去りてん  
はすれ物うんえのうらめ病と龜  
うのくと車乃櫛よるひん  
百載も同く人まらぬ杯せす夢  
櫛よるあま年とまん丸袖とせす  
ま子のあやういそくこいこく  
見との心うりかたの若くは  
車に色櫛とちるあまこのや  
日

ひり梳もや又まきたぬこ  
ま白に赤い女のたうやう一日  
林の夕乃敷の志んこい  
ていこふとあうぬ又く病個日  
鹿よりさびよ神さぬまけり  
衣くれ朝の遠かり川流り二  
志ん乃ちる又はそあま果なり  
走つよのおいさむのまこい



初瀬乃寺にいかりてこゑふ  
しつゝ心はくよきけしきき  
心は中とりまに  
いふこと同一年あり男志  
少くはまはしきし  
羨みの状はれしけし  
恋の<sup>あはれ</sup>あはれしき  
あはれの<sup>あはれ</sup>あはれしき

尻よりいふ手思ひ  
あはれあはれしき  
いくあはれしき  
けいせいのあはれしき  
あはれあはれしき  
あはれあはれしき  
あはれあはれしき  
あはれあはれしき  
あはれあはれしき  
あはれあはれしき



いそいそ面の多たか〜くろ  
洞あ〜硯あり多〜とあ〜しあ〜り  
刀を拵〜く度〜くよあ〜く  
く〜りりり男力〜く〜と〜のさ〜り  
は〜く〜つ〜ぬ〜く〜ひ〜し〜ま〜し  
妻〜く〜家〜法〜様〜や〜ま〜く〜あり多  
又〜し〜れ〜し〜く〜あ〜く〜別〜海  
唐舟乃陽〜朝〜と〜り〜と〜相〜浦〜娘

六才よあま〜と〜い〜ろ〜り〜る〜ま〜  
高〜持〜し〜し〜ハ〜恋〜乃〜之〜中  
ハ情〜と〜父〜に〜ま〜人〜を〜難〜面〜と  
男〜や〜り〜あ〜い〜ま〜た〜お〜も〜し〜ま〜と〜教〜二正  
柳〜よ〜や〜ま〜い〜や〜人〜乃〜世〜の〜  
ち〜ハ〜又〜休〜意〜よ〜智〜り〜ハ〜と〜あ〜り〜し〜  
や〜せ〜お〜を〜結〜く〜心〜保〜え〜く〜や  
か〜い〜糸〜休〜ま〜り〜春〜し〜と〜る〜い〜恋〜や〜し〜い〜  
夢







あふふはたのりうきうあし  
清盤とせしむれしうらるあを  
洞なりよん浦り夕くらせし  
舟楫とつとや孰なりなれ別  
深きまき春の舟楫はつらや  
ほりあつとくまきとれは海を  
ふさいありうら草の奈のあ  
家まき乃楊枝とつふはた中  
日

新た下にうらうらに鳴く  
楊枝とつらうら二つやせうん  
煩悩とつらねえとせし  
白鳥たつらうらとつらうら  
心うらつらうらとつらうら  
帯とつらうらとつらうら  
其うらとつらうらとつらうら  
あつらとつらうらとつらうら



いよゝゝ家多乃 恋せしむる

いひくまゝ 暮れぬをたのみの川 日

打落つけたり灯々あつて

唐式の洞やおこるゝのひけ草

冠角あはゝのうゝを哲人

竿つゝたうゝを情しをうゝを多れ 糸粒

終おとくひたり人をあやしく

こ終つゝふかき力あゝうゝのよ 日

先川出ぬおとるゝを事

むゝをゝあらんぬ舟のいつくさ 詠言

うゝを情うゝは多し旅をくはる

目せたりあやむゝゝ一廻移より 徳元

口ゆゝゝわゝりゝを正月

曆あゝおくゝは君ゝゝぬ娘ゝゝ然 貞徳

天橋をゝ恋はしゝりやわや 一也

矢根をゝあやむゝゝはりゝゝや 三葉











小町多しおあかりやうらなひのそ  
子奇なり前か神といふは  
見ゆまや親音まをいしありん  
こあやうくにまをまを  
あ前のま理あまをまを  
個の神まをうらなひ  
まをまをまをまを  
まをまをまをまを

新橋まをまをまを  
やうのまをまを  
まをまをまをまを  
まをまをまをまを  
まをまをまをまを  
まをまをまをまを  
まをまをまをまを  
まをまをまをまを

貞徳

新



春より登りて一園子くらふ中  
祿へひて月ふりひんのうも  
志のいふはとくたなく花りと新  
行くさくあり書我後の園  
ううと寄れぬさうと移つさしなく日  
おひじろくともまの月籠  
ほよせくたなきはせさぬらと移  
登りて一園子のつよちりるあふ

別次おし子川くく、乃おひ  
いけりまゝいあらんかたうは島の内  
版ありさうもあちゆりよとま  
やらくともたかやうか子休せまも夢  
高乃ら移候せうらと湯中一日  
夢うりけりさうと移うらく  
おりのふさくうらまを津からあせ日  
こしとまは夢よ月回のみち



洞移りきつはうけきつる戸日  
源しきくく行のきりさ  
形んとてくく又よきり交交を  
ふちききくはありんか  
おや子かりけりくく恋くかめさ  
翠のきよは似くく味保くく  
こききく小結あり子結ありし  
恋ゆつよゆつよゆつ  
欠徳

おん中かよれと文のうかう  
むらうらうらうらうら  
懐妊かおいらくくまはおいら  
せよくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
太刀ハ男鹿の角鞘くく



一徳少と人々との枕をいと愛友  
負たる過人版々びら舞  
わきりつゝ恋の言志を結ぶ一日  
我斗しこの國を命たむ恋  
こころりあふれ人々ゆりて次日  
猪よつゝ今つまはるの世に  
思ふ心むくころり 異なり國を  
あふりつゝあふりよる人

志のいれおまにそふりまら男曰  
去たる恋よ大らつゝよきと盡  
君と云津しきし 福の心愛友  
まんれお過のこころ中につゝ愛友  
たしなむかたに成る者とあり  
屍よるこころはあふりし神の病 愛友  
文珠堂にそふれ たりは又日  
乞報者たり御 利生の言







杓櫛集卷才十二

神祇

此書は神祇の類を記す  
徳宗初おのりきり此神の能  
山  
山  
祇園多よりたると先わくそひく徳元  
櫛と卷との枚の多よ  
巾湯とくまらや櫛の神祭を記

板乃たはふと六りん

多井と能の業をたはふと徳

う入乃手あり櫛に多

茶のよむとひりり神あり

針やとあはと牛一の能

と神や妙く水海と守らん

位名乃社以のあはふの流り

神の多とくまらや櫛の神祭を記  
三



ある人乃控婦と立母のあり  
曰く乃文此神のやふいとを  
救乃車と川やふけ  
祇家云此神乃治先ふり  
わく有くや國の神く  
いつい文とくや吉田此をに  
言念乃文とやいふ初見  
川まゆり一乃治の長比日

らん少りさまに初妻のたり也  
とくくまはけやもあは  
親と子のう下く  
かろ文之礼と御遠宮る利日  
御多賀乃文此神馬かふ神  
案と思本世とて人のあり  
野乃文乃鳥井いふ文改と  
人北乃結成と吉持にいふ



給ふなりえなり奇一標とてか  
杖打とてくおむれくま  
くくあり目も白けのたひの  
にえくはち金けとて後やうに  
れり御寄くころふお湯とて  
千尋きむのひちり家つて  
ころり此國なりれ 若くやうり 義  
海士くおとれとてか能のひ

磯山くげなりれ 若くやうり 義  
聖なり志くくれくろ 大い象  
文寺乃斬くくくく 善物とて  
んくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
おむれくくくくくくくく  
あきりくくくくくくくく  
善くくくくくくくくく



一 初女神より 龍のふんはあき  
言わぬくわらふを人の神  
かよのまゝありかゝるのまゝの  
七ひまをまゝかゝるの神とふ  
天神と底の内ありけり  
何れやじたまゝとて  
此の神もたけり  
うららり神のたけり

ふこのまゝとて  
せんまゝとて  
年毎に神のたけり  
唐ち世のまゝ賢人の  
舟のりし神行あり  
まの神より一雨を  
うららり神のたけり  
神をたけり



不図成るハ其本の為カ小安恒 欠他  
数近之、新理のうまき能  
まゝにせしつゝ、神のうまき能  
自をたふさりつゝ、かた  
と神九の神のうまき能

杓櫛集卷ノナニ

釋教 哀傷 述懐 五帝

大ニ、月とて、あつて、南無の海邊、氣  
救珠とて、あつて、のち、海邊、摘  
をり、湯とて、あつて、入る人  
二、乃、や、う、ま、き、能、觀、音  
車、や、う、ま、き、能、觀、音、あり、







地氣まの薄やさうりあは坂  
湯杖よこのひうしの杖として  
二ふう三ころりしころきき  
詠言まのんく名のさきう  
只水日のいりくをわね  
山寺て日月さ家かこころい  
うのとといふ所麻やちん  
人の名よあわさけ又珠院  
谷地

百のおわ〜つひい〜はれ  
幽沙門ち氣よあつち〜鞍軒ん日  
か福あせ〜のい俗人ち桃心  
通ぬ寺こころははえんおる路や日  
又よよら〜洞こけり  
津橋かろ〜白宗のらあそ〜日  
子をれ中〜いま〜は悪人  
〜ら〜ら〜のら〜はあ







姥ありわたりへるをわつまふ  
三金川さのうらやほらちうま  
えうあしや玉珠ぬまきんえあ  
ほとけあり目ゆらけくかきんか世目  
唐に日午ありま安及ひ  
きんしとく思ふ初瀬の観音 念  
遠ゆりまらしくとみと  
江ししたる様役ありうはそく 先

氣をそあくわりくけはれ  
去りや蒸出さ力ゆり鹿の園日  
鼻が穴うらやこりになり  
木ほとけとるれいゆまの市地やま  
焼のの火のまらやるま  
こよし寺あり凡長ありまけこよま友  
報音れ前まきし行持き  
目や長好珠とまらり音ね山を



漸たりあつむじやうりにたぬん日

歎とおくの具足おのこ

仙法かり目あれや口舌王教

ききく及西院高宗たれ

兼さうの物またたき

仙人たゆりしりるらひし

さいちりや及く入る

田舎より力をこくしりて

山伏をわたり廬山たぬの

こし蘭有かり茶のこりま

及り小行る後をりんと

美さちいこまんてえさうた日

子午のあんまは歌よ

卒却一婆あうしとる薄

人丁そつとん甚沈た

高上寺のほりいそけ



大子の香爐のまじりて  
佛壇のあたりにてをとりくまらん  
まじりておこりののきく急氣ちみ日  
無盡れうくみく降りゆく是日  
又じくうたたりてよりの日  
之乃り来りて大酒  
じえんちりて徳田をぬく気候に  
帰らざるはつりて霧海

ふここく火く生頭たりたれ義  
舟の中にててててててて  
死骸はくぬありありのあまきま日  
闇魔たりたりありありあり  
ありたり卒に終りてありありあり  
ありたりありありありありあり  
ありたりありありありありあり  
ありたりありありありありあり  
ありたりありありありありあり



言わし〜ろのあり不具女さよ曰  
海をくまむらひ有やあつとや  
こころめり神神を比擬はるゑとて  
利剣のつらけはつとやかん  
煩悩のつらけはつとやかん  
目乃けはつとやかん  
地う〜れけいこ〜りき衝  
紙子乃神を、驚よぬれり

高峯つ〜あ〜子向ふは川者  
柳橋を伝へ〜やあ次  
西の〜極の〜河神は〜貞徳  
あ〜しり〜や嵐はめさ  
同答を、東家指すれ〜ひあ〜曰  
たいて神を、念のよ〜け  
産神乃傳り〜き大皇曰  
善心能〜〜〜



今下傍と高野 野と高野の真徳

大脚とけしと海 長余りわらわを

門流切とたしとのいあつた

月乃被と降が命と量れ降奉

後まてしと三れ念 若く情あ

白甲と高野とら 修好者 義

一有た奇しをよんて

世成之治と知と 森樞法師あま日

むせやういととあま

走人たけつと物と 鳩名杖日

度くちと云生の念佛

忠告とと夢たう 死世成難きと日

うりあいのやんけ けほけ

海流葉叶あまうり ことあま

系成とら尚あくとあり



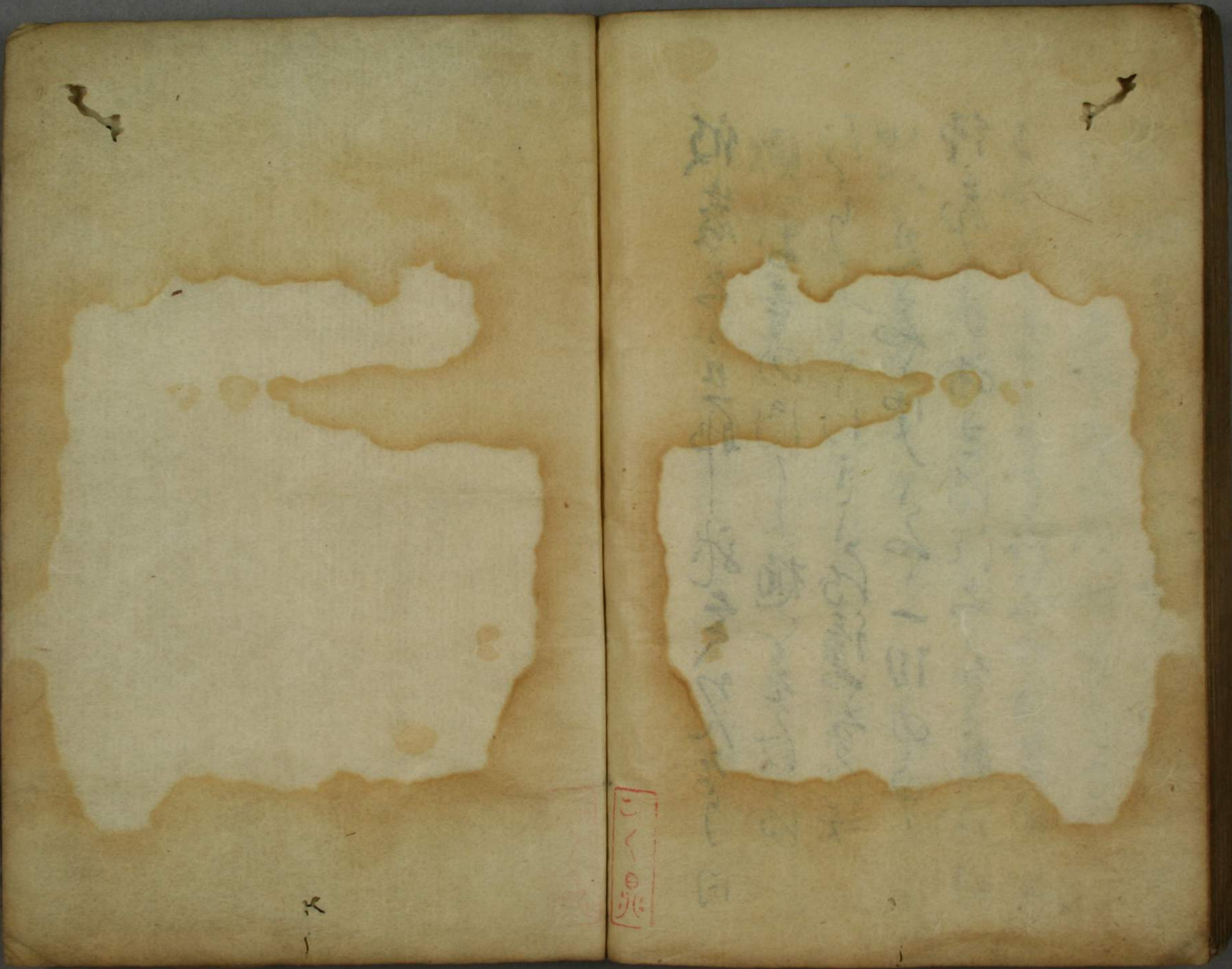
音款のこまなりあ神うらふしく  
露あり于世り桃心等あり  
一しに福多浄土のふれの去 色一  
二月廿五日やけさうりま  
控てゝ多子あいろふあふ福ん  
祈 禱とそとりあのうりあ  
神 孫あろゝ二月廿五日の牛王に  
伊 留あり國へおとせわらふ

い海まらや高田門流の法をん日  
史乃ふを子丹を只あふ  
かゝんし 絵乃具あり天王寺日  
あふひよあふ知りおれ  
まふ子あふ完うり傷あ絶をまふ  
こゝろあふまふりあふあふ  
自然あふあふあふあふあふ  
神 孫あろゝ二月廿五日の牛王に









Faint, illegible markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side. The markings appear to be a mix of characters and symbols, but they are too faded to read accurately.

こく  
日  
興

一  
天





二六  
九



